

令和3年度第3回青森県原子力施設環境放射線等監視評価会議評価委員会 書面開催結果

- 1 開催期間 令和3年10月27日(水)～令和3年11月18日(木)
- 2 参加委員 22名
- 3 原子力施設環境放射線調査結果に係る評価結果(令和3年度第1四半期)
以下のとおり了承された。
 - (1) 原子燃料サイクル施設
環境放射線等調査結果は、これまでと同じ水準であった。原子燃料サイクル施設からの影響は認められなかった。
 - (2) 東通原子力発電所
環境放射線調査結果は、これまでと同じ水準であった。東通原子力発電所からの影響は認められなかった。
 - (3) リサイクル燃料備蓄センター
環境放射線調査結果は、これまでと同じ水準であった。
- 4 東通原子力発電所温排水影響調査結果(令和3年度第1四半期)
水温・塩分、水質及び生物等の各調査結果は、概ねこれまでの調査結果と同様の範囲であった。
- 5 評価委員会委員意見及び回答
以下のとおり。

資料1 原子力施設環境放射線調査報告書(案) (令和3年度第1四半期報)

委員意見	回答
[p28] ストロンチウム-90の分析、アブラナの件、過去の大気圏内核実験に起因するストロンチウム-90の自然変動によるものと考えられるとされていますが、これは壊変による減衰ということでしょうか。【佐藤委員】	委員から御指摘のあった「壊変による減衰」も含め、調査地点の自然環境における変動と判断し「自然変動」と表現しています。【県】

資料3 東通原子力発電所 温排水影響調査結果報告書(案) (令和3年度第1四半期)

委員意見	回答
[全般] 北海道沿岸の赤潮など、これまでにはなかったような海域環境の変化も見られるように思います。原子力施設の海域環境への影響との区別についてはどのように考えていくことになりますか。【佐藤委員】	水温や植物プランクトンの出現種など観測結果が経年変化の範囲から大きく外れていても、周辺海域で同様な傾向が出ている際は、原子力施設の影響ではなく自然要因によるものである可能性が高いと考えられます。 海洋環境全体の変動か、当該海域のみのスポット的な変化なのかJAXA等が提供する衛星データ等を合わせて検討し、調査を継続します。【水産振興課】
[全般] 温排水の報告書の資料で図表が小さくなっておりますが、報告書では今までどおりの印刷になることと理解します。【野村委員】	御指摘のとおり、報告書を製本する際はこれまでどおりの大きさの図表となります。【水産振興課】

参考資料1 原子燃料サイクル事業の現在の状況について

委員意見	回答
<p>「参考資料1」の「7.トラブル一覧」に関し、下記事項について補足願えれば幸いです（JNFL殿のホームページを確認しましたが、下記についての情報が見当たりません。）【杉山委員】</p>	
<p>(1) 「F」字型の簡易的なハンドル回しを想像するが、当該手動弁に「ハンドル回し」を使用した理由はどの様に推測するか。破損の原因としては一般に、弁棒の摺動性が悪いためハンドル回しを使用し、弁座・弁体が閉となったのに気づかず更に回してしまう可能性、あるいは（摺動性に関わらず）全閉状態にあるのに開いていると勘違いして閉方向に回してしまう可能性などが考えられるが、どの様に推測するか。（純水系の当該弁の錆等の発生状況は？ 当該手動弁の現場における開／閉状態表示の有無は？）</p>	<p>当該弁の締めすぎに至る状況は、増し締めや操作の誤り等、様々な状況が考えられます。 しかし、「どのような状況でハンドル回しを使用したか」については、記録が残っておらず、推測するのが難しい状況です。 なお、当該弁に錆等は確認されておらず、開／閉状態は現場において表示していることを確認しています。【日本原燃株】</p>
<p>(2) ハンドル回しの取り扱いについて定めた「社内ルール」が守られていたとしたら、当該手動弁に対しハンドル回しは使用されなかったのか、それともハンドル回しは使用しても「締めすぎ」が回避できたのか。</p>	<p>原則、小口径（配管径40A（ミリメートル）未満）の弁にはハンドル回しを使用しないとの取り扱いを、2019年に社内ルールへ反映しています。 ハンドル回しを使用した時期は不明ですが、当該弁は5年以上操作実績がないため、社内ルールを制定・周知する前に行われたものと考えています。【日本原燃株】</p>
<p>(3) 当該手動弁は「汎用品」と思われるが、「同型式の弁」について漏れ等の異常が無いことを確認したにも関わらず「念のため」新品に交換する理由・懸念はどの様なものか。（因みに、交換対象とする「同型式の弁」の数は概略どの程度か。）</p>	<p>同形式の弁（15か所）は、設備起動中の圧力がかかった状態及びその前後において、漏れ等の異常がないことを確認しています。 しかし、過去に同形式の弁を締めすぎた可能性もあり、本事象同様、弁内部にひび割れが生じ、破損に進展することを否定できないため、同形式の弁を念のため、交換することとしたものです。【日本原燃株】</p>